

子どもの人権を考える授業—国内外の子どもの人権侵害からの学生の学び—

高橋 明美¹⁾ 木村 紀子¹⁾ 笠井 由美子¹⁾

要 旨

本研究は、「子どもの人権」をテーマにした授業を実施し、A看護短期大学学生のアンケート調査を行ったものである。1. 子どもの権利条約の理解、2. 発展途上国および日本の実態、3. 小児看護を行う上での課題について考える授業を展開し、学生の学びを明らかにし、今後の子どもの人権教育の示唆を得ることを目的とした。

その結果、56のコード、19のサブカテゴリが抽出され、また、9つのカテゴリは3つの概念に分類された。【実際の話と映像からの衝撃】【親や周りの大人への怒り】【倫理的ジレンマ】のサブカテゴリから「率直な感情」という概念、【現実の厳しさ】【現実を知る必要性】【小児の特徴】のサブカテゴリから「知識・学びの深化」という概念、【行動の必要性】【子どもの人権擁護】のサブカテゴリから「今後の課題・行動」という概念が導き出された。さらに、感想コードから子どもの権利条約の全40項目中16項目が抽出され、学びを深めることが出来、意図的に教材提供することは有効であることがわかった。

キーワード：子ども 命 人権 子どもの権利条約 発展途上国

I はじめに

小児看護学の看護師国家試験の出題基準に、小児の人権—「子どもの権利と変遷」「児童の権利に関する条約」「権利擁護」「インフォームドアセント」が大きく項目として挙がっており、近年これらは小児看護を教えるうえで大変重要な項目となっている。

子どもの権利が国際的に検討されるようになったのは、1924（大正13）年、「子どもの権利に関するジュネーブ条約」が提示されてからである。1989（平成元）年、「子どもの権利条約」^{1) 2)} が国連で採択され、1994（平成6）年、日本が158番目に批准した。この条約は現在193か国によって締結されている。しかし、子どもの実態を見ると、発展途上国では、Street Children、買春、性暴力、紛争、難民、臓器売買など子どもにとって命までもが脅かされる現状がある³⁾。我が国においても日常的な虐待、育児困難・放棄、いじめなどが根深く問題となっている。しかし、これらの現状や問題について

十分な授業展開が行えていない現実があり、過去の研究においても、看護学生を対象にした授業研究は見当たらない。小児を対象に看護する看護学生や看護師は、子どもの置かれている実態をより理解し、ひとり一人の子どもの幸せを考え、人権を尊重する態度を養う必要があり、考える機会を作ることが効果的な教育につながると考える。

そこで、筆者は平成26年に看護学生に世界の子どもの権利は守られているかという観点から、1. 子どもの権利条約の理解、2. 発展途上国の実態、3. 日本の実態、4. 小児看護を行う上での課題について考えてもらう授業を展開し、どのような学びを得たかをアンケート調査した。昨年結果をまとめ、授業の成果が発見できた（平成27年度第17回神奈川県看護教育フォーラム2016で発表⁴⁾）。今年度はさらに教材を充実させ、前回の結果から課題であった①授業の流れの説明（DVDのみの感想ではなく、世界の現状の講義も含むこと）②子どもの人権を考えさせてくれ、尚且つ最後はハッピーに終結する内容のDVDを選定すること、を意識し、一昨年使用したDVD「闇の子供たち」は内容に悲惨な

1) 川崎市立看護短期大学

描写が多く衝撃が多すぎたため、今年度はDVDを「スラムドッグ\$ミリオネア」に変更し、学生に感想を書いてもらった結果を報告する。

Ⅱ 研究目的

A看護短期大学2年生を対象に、「子どもの人権」をテーマにした授業を実施し、1. 子どもの権利条約の理解、2. 発展途上国および日本の実態、3. 小児看護を行う上での課題について考える授業を展開し、学生の学びを明らかにし、今後の子どもの人権教育の示唆を得る。

Ⅲ 研究方法

1 研究デザイン

質的記述的研究

2 研究対象・期間

A看護短期大学（3年課程）2年生78名 平成28年6月

3 研究方法

- (1) 「子どもの権利条約」および「世界の実態（東南アジア・アフリカ・日本）」について、ゲストスピーカー（日本で働くフィリピンの看護師、発展途上国の国際援助経験のある日本の看護師）とともに講義90分。

注）日本の虐待の現状、ネパール、インドでの子どもの労働の現実、アフリカの赤ちゃん工場の現実の話、フィリピンのスラム街での子どもの強制労働や人身売買の実際の話を書く。

- (2) DVD「スラムドッグ&ミリオネア/Slumdog Millionaire」を鑑賞する（時間の都合で一部カットあり）。90分。

注）2008年のイギリス映画。インド人外交官のヴィカス・スワラップの小説『ぼくと1ルピーの神様』（ランダムハウス講談社）をダニー・ボイルが映画化。インドの大都市ムンバイの中にあるスラム、ダーラーヴィー地区（Dharavi）で生まれ育った少年ジャマールは、テレビの人気クイズ番組『カウ・バンエガー・カロールパティ』（"Kaun Banega Crorepati"、原題は『Who Wants to Be a Millionaire?』日本版は『クイズ\$ミリオネア』）に出演する。そこでジャマールは数々の問題を正解していき、ついに最後の1問にまで到達した。し

かし、無学であるはずの彼がクイズに勝ち進んでいったために、不正の疑いがかけられ、警察に連行されてしまう。そこで彼は生い立ちとその背景を語る。

インドでの子どもの人身売買、強制労働を浮き彫りにした映画。2008年ゴールデングローブ賞4部門、第81回アカデミー賞8部門受賞作。

- (3) 授業終了時に学生に自由記載のアンケートを実施。上記（1）、（2）の講義、DVD鑑賞で一連の講義とみなし、「子どもの人権」についての感想を記入してもらう。

- (4) 得られたアンケート（自由記載）から感想や意見の類似性に着目し、コード化し、サブカテゴリー、カテゴリーと抽象化を進め、カテゴリーの関連性から構造化した。さらに、子どもの権利条約の項目ごとに当てはまるコードを抽出した。分析に関しては、共同研究者3名で検討を行った。

4 倫理的配慮

授業の最初に、研究に関する書面を受講する学生全員に配布し、無記名で参加は自由、授業評価とは一切関係がなく、不利益を被らないことを口頭説明する。アンケート用紙には、研究に「同意」、「同意しない」という項目を入れ、意思表示してもらった。また、A看護短期大学倫理委員会にて承認を得た（承認番号第R70-1号）。授業でのシビアな実態、特にDVDでは、子どもの身体・性虐待のショッキングな場面が出てくるため、授業中や回答中に気分不快などを起こした場合、直ちに授業、回答を回避してよいことを伝える。

用紙の回収について：回答が見えないようにサイズに合った回収箱を準備する。データの取り扱いに関してはデータの漏洩、紛失に細心の注意を行い、データ処理を行った後5年間の保管ののち破棄する。

Ⅳ 結果

1 回収数と回収率

アンケート配布78、回収数55、回収率70.5%、そのうち研究に「同意」を表明した者が48名で有効回答率は87.2%であった。

2 アンケート結果

子どもの人権についての世界の実態の講義、

DVD鑑賞終了後の自由記載から、56のコード、19のサブカテゴリが抽出され、また、9つのカテゴリは3つの概念に分類された。(表1)(図2)。以下コードを《》、サブカテゴリを<>、カテゴリを【】であらわす。

1) 学生の率直な感情

【実際の話と映像からの衝撃】のカテゴリーは、サブカテゴリが<胸が痛い、こわい><驚き、残酷><ハッピーエンド>であった。学生は、《残酷で心をえぐられる思い》《目を覆いたくなる》《気持ち悪くなった》など、率直にその時の感情を述べていた。また、映画は衝撃的な現実を突き付けられた内容であったが《ハッピーエンドで良かった》と最後に気持ちが救われた感情を素直に表現していた。また、発展途上国の実際の体験談と映画を見て《授業を受けるまでピンとこなかった》と初めて現実の事と実感した学生もいた。

次に【親や周りの大人への怒り】は<命、人権が守られていない><親や大人のエゴ>であり、《子どもは親の道具ではない》《子どもの命が大人によって好きなように扱われている》や《子どもが親を思う気持ちを利用するところが許せない》など自分勝手さや《親のエゴ》を指摘していた。

【倫理的ジレンマ】では、<守るべきものが守られていない現実><無関心でいられない><悪循環の繰り返し>であった。《当たり前を守られるべき権利が守られていない現実》《子どもたち自身が保障されるべき権利を知らずに暮らしている》《人間らしい生活を送れないのはなぜなのか》と疑問を投げかけ、《無関心ではいられない》《自分の知らないところで子どもたちが心も体も傷つけられている事を知りたくない》と言う感情をあらわしていた。さらに、《虐待、強制労働などがなくなる限りすべての子どもが幸せに暮らすことはできない》《スラムの環境で育った子どもは又同じことを行い悪循環を繰り返す》というジレンマを感じていた。

2) 知識・学びの深化

【現実の厳しさ】では、<子どもたちの置かれている現実の厳しさ><事実の受け止め>がサブカテゴリで、コードに《根底に貧困がある》《格差社会が現実なのか》《当たり前享受してきた権利が実はすごく恵まれていたんだと感じた》《このような

ことが起きているという事実を受け止めなくてはいけない》があった。

【現実を知る必要性】は、サブカテゴリが<育った環境との比較><現実を知る必要性>であった。コードは《安全な日本に生まれて良かったと思う》《世界の現実を知ることが出来た》《子どもの権利について深く知ることが出来た》《対岸の火事ではない、私たちも考えなくてはいけない》《子どもの権利が守られることがどんなに大切かわかった》であった。

【小児の特徴】では、<小児の育つ環境の大切さの学び><大人の力の必要性>であり、《人がより良く生きていくうえで子ども時代の環境がいかに大切かという事を考えた》《子どもにとって母親がどれだけ大きい存在かという事を実感した》《大人が子どもを支えていくことは必要不可欠》というコードから小児の特徴を学んでいた。

3) 今後の課題・行動

【行動の必要性】というカテゴリーでは、<大人たちの行動の必要性><国同士の協力>で、【子どもの人権擁護】では、<子どもの権利が守られる社会><子どもらしく生きて>であった。コードには、《安全で安心できる環境で子ども時代を送ることが良い》《世界中の子どもたちの人権が守られるようになってほしい》《世界中の子どもたちが子供らしく生きていける未来であって欲しい》《世界中の子どもたちに生存権があり教育を受けられる社会にしていけることが理想》と理想を述べ、自分自身の事として《子どもの権利を守り尊重してあげられるような親になりたい》と言う意見もあった。

その他の意見として、日本の虐待等の報道の仕方に《渦中の子どもの姿が見えてこない》があった。

4) 学生の感想コードから導かれた子どもの権利

学生の感想コードを子どもの権利条約に関連させ抽出してみた。その結果、権利条約の16項目が当てはまった(表2)。『生きる権利・育つ権利(6条)』に関連する感想が5コード、次いで『生活水準の確保(27条)』が4コード、『国の義務(4条)』『差別の禁止(2条)』『親の指導を尊重(5条)』『子どもの養育はまず親の責任(18条)』が各3コード抽出できた。さらに、『子ども

表1 子どもの人権を考える授業での学生の思考

概念	カテゴリー	サブカテゴリー	コード
率直な感情	・実際の話と映像からの衝撃	・胸が痛い、こわい ・驚き、残酷 ・ハッピーエンド	・衝撃的 ・胸が痛い ・こわい ・悲しい ・目を覆いたくなる ・気持ち悪くなった ・驚きの連続 ・残酷 ・心をえぐられるよう ・ハッピーエンド(映画)で良かった、ほっとした ・授業を受けるまでピンとこなかった。
	・親や周りの大人への怒り	・命、人権が守られていない ・親や大人のエゴ	・思った以上に子どもの人権が守られていない国がある ・子どもは道具ではない ・子どもの命が大人によって好きなように使われている ・親のエゴ ・子どもが親を思う気持ちを利用するところが許せない(人身売買) ・自分さえよければいいという人が多すぎ
	・倫理的ジレンマ	・守るべきものが守られていない現実 ・無関心でいられない ・悪循環の繰り返し	・当たり前には守られるべき権利が守られていない現実 ・子どもたち自身が保障されるべき権利を知らずに暮らしている ・人間らしい生活を送れないのはなぜなのか ・無関心ではいけない ・人権が守られていればこんなことにはならない ・自分の知らないところで子どもたちが心も体も傷つけられている事を知り切らない ・虐待、強制労働などがなくならない限りすべての子どもが幸せに暮らすことはできない ・スラムの環境で育った子どもは又同じことを繰り返し悪循環を繰り返す
知識・学びの深化	・現実の厳しさ	・子どもたちの置かれている現実の厳しさ ・事実の受け止め	・貧富の差、根底に貧困がある ・職業や出身で差別を受ける ・格差社会が現実なのか ・日本でも貧富の格差があることを知った ・一日一日生きて過ごすことがどれだけ大変かわかった ・子どもたちが置かれている現実の厳しさを知った。 ・当たり前には享受してきた権利が実はすごく恵まれていたんだと感じた ・このようなことが起こっているという事実を受け止めてくれない
	・現実を知る必要性	・育った環境との比較 ・現実を知る必要性	・安全な日本に生まれて良かったと思う ・世界の現実を知ることが出来た ・対岸の火事ではない、私たちも考えなくてはいけない ・子どもの権利について深く知ることが出来た ・世界に目を向けると自分の価値観が変わる ・親子の問題ではなく国の問題だと思った ・子どもの権利が守られることがどんなに大切かわかった
	・小児の特徴	・小児の育つ環境の大切さの学び ・大人の力の必要性	・命を尊重することの大切さを改めて学んだ ・人がより良く生きていくうえで子ども時代環境がいかに大切かという事を考えた ・子どもにとって母親がどれだけ大きい存在かという事を実感した ・生きるという事は大変であるが子どもである方がより難しいと感じた ・子どもは大人の力で生きにくくも生きやすくなる ・大人が子どもを支えていくことは必要不可欠
今後の課題・行動	・行動の必要性	・大人たちの行動の必要性 ・国同士の協力	・世界中の子どもたちのために大人たちが対策を考え行動していくことが大切 ・自分にできることがあれば力になりたい ・もっと国同士で協力して解決していかなければならない ・大人が本気になって行動しなければならない
	・子どもの人権擁護	・子どもの権利が守られる社会 ・子どもらしく生きて行ける未来	・安全で安心できる環境で子ども時代を送ることが良い ・世界中の子どもたちの人権が守られるようになってほしい ・世界中の子どもたちが子供らしく生きていける未来であって欲しい ・世界中の子どもたちに生存権があり教育を受けられる社会にしていけることが理想 ・子どもの権利を守り尊重してあげられるような親になりたい
	・その他	・渦中の子どもの姿	・日本での虐待・貧困の報道のされ方は大人が大人の批判をするばかりで、渦中の子どもの姿が見えてこない一どうやって子どもの権利を守っていくかということまで考えがおよばない

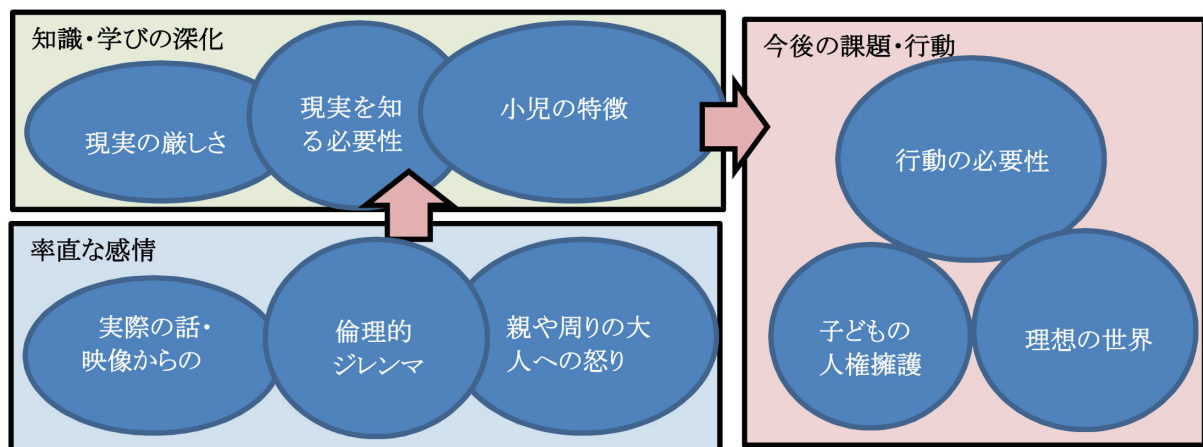


図2 概念図

表2 学生の感想から導かれた子どもの権利

子どもの権利条約	コード
差別的禁止(2条)	<ul style="list-style-type: none"> ・スラムの環境で育った子どもは又同じことを繰り返し悪循環を繰り返す ・貧富の差、根底に貧困がある ・職業や出身で差別を受ける
こどもにとってもっとよいことを(3条)	<ul style="list-style-type: none"> ・人がより良く生きていくうえで子ども時代の環境がいかに大切かという事を考えた ・安全で安心できる環境で子ども時代を送ることが良い ・世界中の子どもたちが子供らしく生きていける未来であって欲しい
国の義務(4条)	<ul style="list-style-type: none"> ・親子の問題ではなく国の問題だと思った ・もっと国同士で協力して解決していかなければならない
親の指導を尊重(5条)	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもの命が大人によって好きなように使われている ・親のエゴ ・子どもにとって母親がどれだけ大きい存在かという事を実感した
生きる権利・育つ権利(6条)	<ul style="list-style-type: none"> ・思った以上に子どもの人権が守られていない国がある ・人間らしい生活を送れないのはなぜなのか ・命を尊重することの大切さを改めて学んだ ・生きるという事は大変であるが子どもである方がより難しいと感じた ・世界中の子どもたちに生存権があり教育を受けられる社会にしていけることが理想
意見をあらわす権利(12条)	<ul style="list-style-type: none"> ・日本での虐待・貧困の報道のされ方は大人が大人の批判をするばかりで、渦中の子どもの姿が見えてこない
適切な情報の入手(17条)	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもたち自身が保障されるべき権利を知らずに暮らしている
子どもの養育はまず親の責任(18条)	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもは道具ではない ・親のエゴ ・子どもの権利を守り尊重してあげられるような親になりたい
社会保障を受ける権利(26条)	<ul style="list-style-type: none"> ・貧富の差、根底に貧困がある ・格差社会が現実なのか
生活水準の確保(27条)	<ul style="list-style-type: none"> ・スラムの環境で育った子どもは又同じことを繰り返し悪循環を繰り返す ・貧富の差、根底に貧困がある ・格差社会が現実なのか ・日本でも貧富の格差があることを知った
教育を受ける権利(28条)	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもたち自身が保障されるべき権利を知らずに暮らしている ・世界中の子どもたちに生存権があり教育を受けられる社会にしていけることが理想
休み・遊ぶ権利(31条)	<ul style="list-style-type: none"> ・虐待、強制労働などがなくならない限りすべての子どもが幸せに暮らすことはできない
経済的搾取・有害な労働からの保護(32条)	<ul style="list-style-type: none"> ・親のエゴ
性的搾取からの保護(34条)	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の知らないところで子どもたちが心も体も傷つけられている事を知り切らない
誘拐・売買・取引からの保護(35条)	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもが親を思う気持ちを利用するところが許せない(人身売買)
あらゆる搾取からの保護(36条)	<ul style="list-style-type: none"> ・虐待、強制労働などがなくならない限りすべての子どもが幸せに暮らすことはできない

にとってよいことを(3条)』『意見をあらわす権利(12条)』『社会保障を受ける権利(26条)』『教育を受ける権利(28条)』が各2コード、『適切な情報の入手(17条)』『休み・遊ぶ権利(31条)』『経済的搾取・有害な労働からの保護(32条)』『性的搾取からの保護(34条)』『誘拐・売買・取引からの保護(35条)』『あらゆる搾取からの保護(36条)』が各1コードずつ抽出された。

V 考察

今回の授業は、虐待、Street Children、児童買春、人身売買等世界の子どもの置かれた状況から、II 目的の1、子どもの権利条約の理解、2、発展途

上国の実態、3、日本の実態、4、小児看護を行う上での課題について考えてもらうことがねらいで、子どもの人権を考えることであった。また、平成26年に実施した授業研究4)の反省から、DVDを「闇の子どもたち」からハッピーな結末の「スラムドッグ&ミリオンア」に変更した。発展途上国の実態を話していただく講師もネパールの看護師から今回はフィリピンの看護師に日本語で講義をしてもらい、実際のフィリピン国内でのドキュメンタリー番組の一部を紹介し、より現実味のある内容とした。

子どもの権利条約の概要説明とゲストスピーカーの講義に90分、DVD上映を90分として2コマの授業時間内で進めていった。

丸山⁵⁾は「看護者は、子どもに対してはより最新の注意を払って人権の尊重に務める必要があり、看護基礎教育において、子どもの人権を尊重した看護実践について学ぶことは重要である」と言い、添田⁶⁾は「実際に葛藤の体験、困った体験があると、子どもの権利に対する認識は高められる」という。また、橘⁷⁾は「教員が明確な目標を持ち、学生の倫理的感受性を高められるような場面設定を行っていく必要がある」と言っている。小児のみならず看護の場面では、日頃から倫理的感性を高めていくことが重要であり、そのためには授業での意図的な話題提供や考えさせる工夫が必要である。また、臨地実習においても現象をどう倫理的に判断するかを訓練しなければならず、人権について理解し、倫理的感性を磨いていくことは教育にとって大事な柱となる。

学生の感想を整理し、コード化すると、【実際の話と映像からの衝撃】 【親や周りの大人への怒り】

【倫理的ジレンマ】のサブカテゴリから「率直な感情」という概念、【現実の厳しさ】 【現実を知る必要性】 【小児の特徴】のサブカテゴリから「知識・学びの深化」という概念、【行動の必要性】 【子どもの人権擁護】のサブカテゴリから「今後の課題・行動」という概念が導き出された。これは、平成26年の結果とほぼ変わらなかったが、《ハッピーエンドで良かった》という感想から、前回の「闇の子どもたち」では、言いようのない衝撃のはけ口が見つからない状況がうかがえたが、DVDを変更したことで、今回はハッピーな結末に安堵していた様子が見えられた。

学生は、講義と映像で子どもの現状を知り衝撃を受けていた。情動レベルでは、多くの学生がこわい、悲しい、胸が痛い、心をえぐられる等の感情を抱いていた。フィリピンの現状はフィリピンの方が語ってくれたからこそ、現実感が明確であった。さらに、発展途上国で実際に活動された方の話もまた、現実感があり、スムーズに学生の感情に入っていくと考えられる。さらに、DVDに出てくるスラム街の貧しさ、強制労働、買春の実態から、子どもの人権が守られていない現実にはジレンマを感じていた。しかし、現状から目を背けないで知ろうとし、子どもの扱いや暮らしの差等、知識を得る機会、すなわち今までほとんど考えたこともなかった子どもの人権について考える機会となっていた。更

には、何か役に立ちたい、何ができるのだろうかと考え、無関心ではいけない、子どもの権利が保障され実行されるにはどうしたらよいか等、人権について深く考える必要性を学んでいた。最終的には、今後の自己の行動や世界の子どもの理想の姿にまで思考していたことから、前出の丸山⁵⁾の言う「子どもの人権を尊重した看護実践」に向けての基礎固めになった。添田⁶⁾の言う「葛藤の体験、困った体験があると認識が高まる」という点では、実践はしていないが、意図的な授業での模擬体験は子どもの権利に対する認識を深め、今後の看護実践に生かせると考える。さらに、橘⁷⁾の言う教師の意図した場面設定および教材提供が授業のねらいを十分達成したと言える。

また、学生の感想コードから導かれた子どもの権利を見ると、子どもの権利条約全40項目中16項目もの子どもの権利が抽出されており、授業では「子どもの権利条約」²⁾について、概要のみの説明であったが、講義とDVDから学びとることが出来ていたと言える。今後はこの学びを実際の看護場面で活用できるよう、学生にフィードバックさせながら、一つ一つの日々の出来事や臨床場面での現象を大切に取扱い、倫理的感受性を高めていく教育が必要である。

Ⅵ 結論

子どもの人権について学生に意図的に教材提示し、考える授業を展開したことにより、

1. 【実際の話と映像からの衝撃】 【親や周りの大人への怒り】 【倫理的ジレンマ】のサブカテゴリから「率直な感情」という概念、【現実の厳しさ】 【現実を知る必要性】 【小児の特徴】のサブカテゴリから「知識・学びの深化」という概念、【行動の必要性】 【子どもの人権擁護】のサブカテゴリから「今後の課題・行動」という概念が導き出された。
2. 感想コードから子どもの権利条約の中の16項目が抽出され、学びを深めることが出来ていた。
ゆえに、今回の授業展開及び提示したDVDは小児の人権に対する学びを十分にもたらしした。

Ⅶ 本研究の限界と課題

本研究は、2コマにわたり、子どもの人権を考える授業であった。講義—DVDという一連の流れか

ら学生に学んでもらおうと意図した。しかし、時間の都合でDVDを一部カットしたり、世界の現状といえども、フィリピン、ネパール、アフリカ、日本の一部の現状の話であり、全体が把握できたとはいえない。また、子どもの権利条約についての講義時間も限られ、十分な理解を得る組み立てにはならなかったと考える。

今後、授業の組み立て、時間配分の改善とこの学びを実際の看護場面で活用できるよう、日々の中での

倫理的感受性を高めていく手立てが必要である。

謝辞

本研究に協力いただいたA看護短期大学の2年生の皆様へ感謝申し上げます。

著者資格

共同研究者N.KおよびY.Kは、データ収集およびデータ抽出、整理、分析を行った。

文 献

- 1) ユニセフ子どもの権利条約 <http://www.unicef.or.jp/kodomo/kenri/syo25-32.htm>
- 2) 小口尚子, 福岡鮎美. 子どもによる子どものための「子どもの権利条約」. 小学館, 2008.
- 3) 池田恵子, 松山優子. ストリートチルドレンを題材にした開発教育の学習課題の検討. 静岡大学教育学部研究報告. 第37号 (2006), P11~27.
- 4) 高橋明美他. 子どもの人権を考える授業～国内外の子どもの人権侵害の現状からの学び～. 第17回神奈川県看護教育フォーラム2016集録集. 2016, P71-73.
- 5) 丸山真紀子. 看護学生が捉える入院中の子どもを尊重した関わりー小児看護実習を経験した学生を対象にー. 日本小児看護学会誌. Vol17, No. 1, 2008, p65-71.
- 6) 添田啓子他. 「子どもの権利」演習における看護学生の学び. 埼玉県立衛生短大紀要. 1997.
- 7) 橋則子他. 小児看護学実習で学生が学んだ子どもの権利を尊重した関わりについて. 福岡県立大学研究紀要. Vo8, No1, 2011.
- 8) 白石晃一. イギリスの中等教育前期課程「公民科」における単元「人権」の授業について. 桜花学園大学人文学部研究. 紀要 7, 2005, 1-18.
- 9) 李節子, 榎井緑, 丹羽雅雄. 無国籍状態にある子どもの不就学の実態とその背景に関する研究ー国際人権法の視点からー. 社会医学研究. 第23号、2005.
- 10) 加藤千恵子. 赤ちゃんと人権ー地域における子どもの権利と教育ー. 名寄市立大学道北地域研究所年報. 第29号, 2011.
- 11) 中島登美子. 子どもの権利とその保障. 子どもケア. 2006, (2) p44-48.